

2018 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

現代の母子関係と子どもの QOL および自己意識との
発達に関連

指導教員(谷向みつえ教授)

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 11720001 氏名 井谷有希

目 次

I .問題	3
1.問題提起	
2.母子関係とその影響に関する先行研究	
3.本研究の目的	
II .方法	7
1.調査対象者	
2.調査方法	
3.調査内容	
4.倫理的配慮	
III .結果	11
1. QOL や自己意識、発達年齢についての記述統計	
2.CAT 図版から見た母子関係に関する分析	
(1)CAT 図版における母子関係の分類	
(2)母子関係と QOL 得点の関連	
(3)母子関係と自己意識の関連	
(4)母子関係と精神発達の関連	
3.学年差からみる各因子	
IV .考察	20
1.母子関係の及ぼす影響	
2.母子関係の分類	
3.本研究の意義	
4.今後の課題	
V .謝辞	24
VI.引用文献	24

I .問題

1.問題提起

近年、家族の生活形態が変わり、家庭で親が子どもと過ごす時間に変化が見られる。内閣府の調査(2008, 2018)によれば、労働時間が長時間化することによって親の帰宅時間が遅くなり、平日の親子の接触時間が減少し、親が子どもの抱えている悩みや問題に気づきにくくなっている。厚生労働省が定期的に行っている国民生活基礎調査では、母親の就業率は年々増加し、平成 29 年の同調査結果で 18 歳未満の子どもがいる家の母親の就業率は 70.8%と過去最高になった。その中で、0 歳児をもつ母親の就業率も 42.4%と、乳幼児をもつ家庭の母親の約 4 割が何らかの形で就労しているという状況にある。就労している母親と専業主婦として家庭にいる母親とでは、子どもが母親と接する時間に差が生じることが推測される。このような母子の会話時間の質と量の違いは、いったい子どもにどのような影響を与えるのだろうか。小松(2003)の調査では、母親が母子間の会話を肯定的な経験を共有する場として捉えている場合、子どもの自己・他者の理解、さらにはその後の他者とのかかわりに影響することが明らかにされている。また、会話の量(時間)は子どもの学習時間の増加につながるとも言われている(木村,2009)。このように、母子関係は子どもの心身の発達にさまざまな影響を与えることが明らかにされている。

子どもの心身の健康の指標の 1 つに、**Quality of life**(以下、**QOL**)がある。**QOL**とは、健康の心理的な指標であり、日々の生活の中で個人の機能的能力も考慮に入れた心理・社会的なモデルから発した概念(古荘・柴田・根本・松寄,2014)である。子どもの **QOL** について、Koot(2001)は、“普遍的な人間の権利に基づく、その子どもの文化と時代の中で生活の複数の領域における主観的かつ客観的 **well-being** である”と論じている。一方 Schipper, Clinch & Olweny(1996)は、“子どもの **QOL** 概念は、身体的・認知的機能、心理的 **well-being**、社会的な関係の領域を中心にした日常的機能の領域から捉えるべきであり、**well-being** にかかわる子どもの主観的評価こそが **QOL** の測定に最も重要である”と指摘した。古荘らはそれらの考えを受け、子どもの **QOL** とは、身体的、心理的、社会的側面から、日常的機能の複数の領域における客観的かつ主観的 **well-being** といえりと結論づけている。これらのことから、家族内での子どもに対するかかわりも **QOL** に大きく関係すると推測される。

子どもの健全な発達をとらえるもう一つの視点としては、自己意識を挙げることができる。自己意識とは他者や外界と区別された自我として自分を意識することである。都筑(1981; 1983)は、自己意識の健全な発達には子どもが自身の現在の生活と未来の生活の両方が豊かなものとして認識していることが重要であると述べている。自我形成には、「自分はこれでよい」と感じたり自己の価値を見出したりすることが必要不可欠である。子どもの自我形成には親の養育態度が影響すると考えられており、そのことについて戸田(1990)は、親の実際の態度(客観的環境)や認知された親の態度(主観的環境)が子どもの自我

形成に直接的・間接的に影響を与えると論じている。つまり、人間関係の基盤となる親との関係性が影響していると考えられる。

本論文では、現代の子どもの QOL と自己意識の発達に焦点をあて、母子関係の影響について検討することを目的とする。この目的のため、まず、母子関係とその影響についての先行研究について概観する。その上で、先行研究において未検討の問題について指摘し、本研究について述べる。

2. 母子関係とその影響に関する先行研究

アタッチメントを形成することは子どもの社会的・情緒的な発達において非常に重要である。アタッチメントとは、乳児が養育者との接近を求める行動に現れるような母子間の結びつきのことをいう (Bowlby, 1969)。Kerns (2008) によると、児童期における子どもは仲間との親密な対人関係を大きく拡張させ、また状況に応じて異なる対象を安全基地として受け入れることができるようになるが、主要なアタッチメント対象は養育者のままであることが圧倒的に多いとされており、養育者とのアタッチメントの形成は子どもにとってなくてはならないものである。乳幼児期を経て、児童期においても子どもが新しい環境に適応していく過程で養育者の役割は重要と言える。

アタッチメントの形成は、基本的信頼感の形成や養育者以外の他者との関係性の質に影響を与え、さらに内的作業モデルの形成 (Bowlby, 1969) という安定した対人関係を築く礎となる。内的作業モデル (以下、IWM) は (特に「アタッチメント人物についての IWM」)、母親が目の前に存在するとき・不在のとき両方で母親の行動を予測し、母親と実際の (あるいは想像上の) 相互作用行動をガイドするといったシュミレーション・モデル的な意味合いを含んでいる。IWM とはアタッチメント対象に子どもがとった行動やとろうと意図した行動に対してアタッチメント対象がどう反応したかという歴史の反映であり、子どもはアタッチメント対象との具体的な経験を通して IWM を形成していく。重要な人物とのアタッチメント関係は、幼児期に確立して児童期に安定し、やがて、思春期・青年期においても重要な意味を持つようになる。しかし、児童期前期というのは小学校入学などの新しい環境への適応というものがあるのと同時に、未だ IWM が定着しているとは言えない時期である。したがって、安定した IWM が形成されると、アタッチメント対象と離れても「きっと再会できる」と信じ、その場面を耐えることができるが、安定的に機能していないと子どもは日常生活に支障をきたすほどの不安を生じることもある。

しかし、アタッチメントには個人差があることが見いだされ、その後の研究によってアタッチメントのタイプを分類するための方法が提案された。たとえば、Ainsworth, Blehar, Waters, & Walls (1978) は、ストレンジ・シチュエーション法を考案し、乳児の養育者に対するアタッチメントのタイプを「安定型 (Secure : B タイプ)」と「不安定型 (Insecure)」の 2 分類にし、不安定型をさらに「回避型 (Avoidant : A タイプ)」と「両極型 (Ambivalent : C タイプ)」と

プ)」の2つに分け、計3分類とした。その後、Main & Solomon(1990)によって Ainsworth の3分類で評価できない、養育者に対して混乱した行動を示す「無秩序型(D タイプ)」が提案された。安定型の子どもは「自分は他者に受け入れられている」という安定した IWM を形成しているために、養育者に対して見通しを持つことができ、分離したときには一時的な不安は見せるものの、再会時にはすぐに安定したアタッチメント関係を持つことができる。しかし、不安定型や無秩序型の子どもたちは、養育者との間に安定した母子関係を形成することができず、結果として養育者を避けたり、アンビバレントな感情を表出したり、混乱した様子がみられることもある。

乳児期に自分のシグナルや行為に対して母親からの情愛深く有益な応答を得ることは、“自分は環境(事態)を統制することができる”という安定型の子どもの一貫した心理的経験につながり、それこそが後年の子どものコンピテンスや基本的信頼感の発達の土台となっていく(Ainsworth & Bell, 1974)。また、Sroufe & Waters(1977)は、安定したアタッチメントを形成している子どもは、環境との相互作用や人との相互交渉にいて、より多大な信頼感と自己効力感をもっており、魅力的に見せ、結果、同年齢の他児が安定型の子どもを相互作用の相手として選び出すことにつながっていくことを報告している。また、谷口(2016)は子どもが過去の出来事を語る際に、親が子どもたちの試みていることに敏感に気付いてあげることによって、自己、親、社会世界の IWM の良好な働きを向上させ、そのことが安定したアタッチメントタイプを育むことにつながるとしている。つまり、親の敏感さや的確な情緒応答性は安定型のアタッチメントを育み、心身の発達において重要な要因と言える。

一方で、非安定型のアタッチメントは心身の発達に好ましくない影響を及ぼす可能性がある。その一つとして、分離不安があげられる。分離不安は、Bowlby(1969)が提唱した近接性の維持、安全な避難場所、分離不安、安全基地の4つの愛着機能のうちの1つであり、“分離に際し苦悩し、抵抗する傾向”である。両親や他の主要なアタッチメント対象からの分離に対する不安は、就学前の数年の間は顕著なままであるが、対象が物理的に存在しなくても、「心のなか」に保持する能力を身につけることによって、不安は漸減していく。分離不安そのものは、誰でもどのような病態でも生じる可能性があるものであるが、子どもの素質や養育環境の要因がからんで、乳幼児期のアタッチメント関係が十分に育まれなかった場合や、幼児期後期から児童期にかけて、養育者が子どもの不安を十分に受け止められる心的状況にない場合、分離不安は一層強まる可能性がある。アメリカの精神医学会の精神疾患の診断と統計マニュアル5版(DSM-5)や、世界保健機構(WHO)の診断基準 ICD-10 で定められた診断基準を満たす子どもは分離不安障害と診断されることもあり、哀願、かんしゃく、涙を流して泣く、あるいは頭痛や吐き気などの身体症状を表すこともある。

以上のように、幼児期から児童期前期における母子関係についての先行研究では母親への調査や子どもへの行動観察の結果に基づいて、安定型のアタッチ

メントが非安定型と比べて心身の健全な発達を導くことが明らかにされている。しかしながら、幼児期から児童期前期の子どもに直接母子関係の質を行うものはほとんど行われていない。Bowlby(1969)がもともと子どもの内的な心的表象としてアタッチメントを概念化していることを踏まえると、その理論に基づく検証を行う上では子どもに対して母子関係の質を直接的に問うという研究手法をとることが重要であると考えられる。

上記に該当する数少ない調査としては、幼児・子ども絵画統覚検査図版(以下 CAT)日本版(戸川, 1955)を用いた久保田(1995)や駒田ら(2001)の研究が存在している。久保田は、CAT 図版についての自由記述から表象レベルのアタッチメントを分類することの妥当性を示している。また駒田らは、分離・再会の肯定的な意識化が多い子どもは安定した IWM の早期獲得を促すことを示している。ただし、どちらの研究においてもアタッチメントの影響を分析する際には、安定群と非安定群という 2 分類を採用している。冒頭で述べたように、母子関係が複雑化した現代では、アタッチメントのあり方も多様化しており、2 分類という視点では子どもの発達への影響を見落としてしまう可能性が懸念される。

3.本研究の目的

本研究では、現代の子どもが形成する母子関係が、子どもの QOL にどのような影響を与えるのか、良好な母子関係がどのような自己意識を子どもに芽生えさせるのか、母子関係と精神発達の関連性の 3 側面を捉えることを目的とし、あわせて母子関係や QOL、自己意識、精神発達の学年による発達の変化についても検討をする。

母子関係の測定については、先行研究に則り CAT 図版を用いて、子どもの母親との関係性について調査を行う。久保田や駒田らの研究では子どもが示す母子関係を細分化していたが、その後の分析には母子関係安定群とその他群の 2 群に再分類して分析を行っている。本研究では分析の際に、より詳細な図版の反応の分類に基づいて母子関係の差異を検討する。

次に、調査で得た母子関係の分類が QOL 得点や自己意識の発達とどのような関連にあるのかを分析する。先行研究に基づけば、安定した母子関係を築いている子どもは、心身の健康状態も良好で自身に対する満足度も高く、自己意識の発達も促進されるが、細分化した分類によって他の効果が出るかもしれないために、探索的研究も行う。

Ⅱ.方法

1.調査対象者

調査対象者は、私立の幼保連携型認定こども園に通園する年長児 27 名と、同園に付設の学童保育に通所する小学校低学年子ども 52 名(1 年生 22 名、2 年生 20 名、3 年生 10 名)の合計 79 名であった。対象者の内訳は、男児 38 名(年長 15 名、1 年生 8 名、2 年生 8 名、3 年生 7 名)、女児 41 名(年長 12 名、1 年生 14 名、2 年生 12 名、3 年生 3 名)であった。平均年齢は、男児が 7.13 歳($SD=1.14$)、女児が 7.12 歳($SD=0.95$)であった。なお、本研究において年長児は小学校入学直前の時期に調査を行っているため、調査対象者全体を表す場合には小学生と年長児を合わせて「子ども」と表記する。

2.調査方法

調査は 2018 年 2 月から 2018 年 3 月の間、午後の自由保育の時間と学童保育の時間で調査依頼をし、快く了承していただけたため、その時間内で別室をお借りし、個別に対面調査を実施した。本調査では子どもと対話しながら回答データを収集する必要があったため、聞きもらしなどがないように事前に園長の許可を得て録音を行った。

子どもとの面接では、ラポールを形成するために、軽く雑談をしながら本人から年齢、誕生日、園児であればクラス名、小学生であれば学年、一緒に住んでいる家族、きょうだいの有無、出生順位を聞き取り、子どもが研究者に慣れてきたところで調査を開始した。ひとり親家庭の子どもは、事前に担任の先生から情報を教えていただき、一緒に住んでいない親については質問しないように配慮した。

3.調査内容

(1)幼児・児童絵画統覚検査図版日本版(戸川,1955)

本研究では、母子関係の質を測定するために、幼児・児童絵画統覚検査図版(以下 CAT)日本版(戸川,1955)を実施した。CAT は、対象者に対して日常生活における葛藤場面が描かれたいくつかの図版を提示し、その内容についてストーリーを作成するように求める投影法の課題である。CAT の大きな特徴として、図版に描かれている登場人物がすべて動物であるということがあげられる。このことは、Bellak(1971)の「CAT において被験児が語るストーリーの中の主人公は、本質的には自分自身である」という仮説、および「子どもは人間よりも動物により同一視しやすい」という仮説に基づいている。さらに、CAT は、子どもにとって親やきょうだいなどといった重要な人物との関係についての理解を深めるためにデザインされたものである。久保田(1995)が CAT 図版の自由記述から表象レベルのアタッチメントを分類することの妥当

性を示しており、本研究でも子どものアタッチメントの IWM の測定を行うために CAT を選択した。

本研究では駒田ら(2001)の研究に則って家庭内における様子を表した図版 3 と分離場面における様子を表した図版 7 を選択した。各図版の内容は以下のとおりであった。

《図版 3》

「親リスが赤ちゃんリスを抱っこしており、その右横に子リスが立って見ている」場面である。親リスは右横の子リスの方向に手を伸ばしているが、この手ぶりは“こっちにおいで”と招いているのか、あるいは接近することを拒否・禁止しているのか、その意味については多義的である。ここで登場する 3 匹のリスのうち、どれを主人公チロとするのか。また、その他のリスを誰として、どのような関係を思い描くのか、この 2 点に焦点を当て、ここでは上記のストーリーにどのような母子関係、きょうだい関係が組み込まれているかに着目し、子どもの語りの上での母子関係の反映に着目した。

《図版 7》

「一匹のリスは園庭で他の動物達といっしょにお遊戯をしている。門の前のリスは幼稚園に行くのを嫌がっており、門の右手のリスは幼稚園を無視するかのように振る舞っている」場面である。本来、この図版はどのリスをチロとするかに着目することによって幼稚園への適応・不適応、および幼稚園への関心等を見るものである。ここでは門の前のリスとその親リスとの関係をどのようにストーリーに組み込むのかを中心として、母子分離場面でのアタッチメントの IWM の反映として取り上げた。

データ収集は子どもによる自発的な発話を記録するのが本来の CAT の手法であるが、本調査ではまだ自分自身の言葉で図版について説明することが難しい年齢の子どもも含まれていたため、「チロちゃんはこの絵のどこにいるかな?」、「じゃあこの(他のリスを指さして)リスは誰かな?」、「チロちゃんは今なにをしているところなのかな?」、「この(他のリスを指さして)リスとチロちゃんはどんなお話をしてる?」など、子どもの状況に応じて質問をして回答を促した。図版は 3、7 の順に提示した。

(2)小学生版 QOL 尺度(柴田,2012)

本研究では、小学生版 QOL 尺度(柴田,2012)を用いることとした。本来の小学生版 QOL 尺度は、「身体の状態」、「心の状態」、「自分自身」、「家族との様子」、「友達との様子」、「学校生活」、「病気について」という 7 つの下位尺度から成り立っており、原尺度である「Kid-KINDL^R」を柴田(2014)が日本語に翻訳し、日本でも使用可能か検討したものである。本研究では、自己意識の発達や母子関係をとらえることを目的とするため、「身体の状態」と、患児にも適用できるように作成された「患児用モジュール(disease module)」の「病気について」の 2 つの下位尺度を除いた 5 つの下位尺度を実

施した。また、下位尺度の「学校」についての質問項目は、年長児が授業やテストがないことを考え、2つの質問項目を省略し、計18項目を用いた。

なお、調査時期は年長児が就学する1か月前ということで、本研究では年長児と小学生で比較できるように、年長児に対しても統一して「小学生版 QOL 尺度」を使用することとした。

小学生版 QOL 尺度は、低学年児にも個別の面接調査によって信頼性の高い答えを引き出すことができることが報告されており、妥当性も示されているため、本研究も全ての子どもに個別による面接調査を実施した。

どの年齢の子どもに対しても回答方法は、「ぜんぜんない」、「ほとんどない」、「ときどき」、「たいてい」、「いつも」の5件法を、5種類の大きさの違う丸を描いた図版を見せ、自分の気持ちがどれに近いのか、当てはまるものを指差しで回答してもらうこととした。

(3)自己意識の発達の力動過程の検査(都筑, 1981)

子どもの自己意識の測定をするために、都筑(1981)が Zazzo(1960)のベスティアール検査を基にして作成した、自己意識の発達の力動過程の検査（以下、自己意識検査）を用いた。

ベスティアール検査とは、子どもの情緒的発達の障害を診断するために考案されたものであり、病理学的・発生的・差異的視点から、子どもの日常的な意識や態度を検討し、子どもの社会的・情緒的な発達水準を明らかにしようとするものである。ベスティアール検査の特徴は、子どもの自己意識を、子どもが自分自身の発達について抱いている意識や自己の成長への欲求という側面との関連において力動的に把握できることと、検査自体が一種の投影法だということである。

自己意識検査は8つの質問項目を対象者に問うものである。質問項目を Table1 に示す。

自己意識検査は質的なものであるため、分析は先行研究に依拠して、質問ごとに検討するものとした。

Table1 自己意識検査の質問項目

①あなたはもう一度赤ちゃんになりたいですか。
②あなたは大人になりたいですか。
③(現在の年齢)の自分は気に入っていますか(満足していますか)。
④すぐに1歳年をとり、大きくなりたいですか。
⑤早く大きいおにいさん(おねえさん)になりたいですか。
⑥早くおとなになりたいですか。
回答方法：(はい いいえ)
⑦もし、どんなとしにでもなれるとすれば、次のうちどれに一番なりたいですか。
回答方法：(赤ちゃん おとな 今のまま)
⑧1年前の()組のときと今とを比べたとき、あなたは、以下のうちどれですか。
回答方法：(たくさん変わった 少し変わった あまり変わらない)

(4)グッドイナフ人物画知能検査(小林,1977)

子どもの精神的な発達の1つの指標として、グッドイナフ人物画知能検査(小林,1977)を用いた。本課題では、「人の絵をひとり描いてください。頭から足の先まで全部描いてね」と調査対象に伝えた後、白紙と黒鉛筆を渡した。書き終えた児童に誰の絵を描いたかの聞き取りも行った。描かれた絵については持ち帰っていいかを児童ひとりひとりに確認し、承諾を得た上で回収した。採点は、定められた採点基準にそって行った。

なお、各学年において実年齢より1歳以上発達年齢が低いものは発達年齢「低群」、実年齢と比較して点数の上下差が1歳以内のものは発達年齢「相応群」、実年齢より1歳以上点数が高いものは発達年齢「高群」の3群に分類して分析を行った。

4.倫理的配慮

調査にあたって、関西福祉科学大学の倫理審査委員会の承認を受けている(承認番号：17-47)。調査は園長の代諾を事前に得て実施しており、実施方法についても事前に園と相談の上、配慮している。また、調査を始める際、子どもには本調査の目的、プライバシーの保護、実験を中断する権利について平易なことばで説明し、同意を得てから実施した。

Ⅲ.結果

1. QOL や自己意識、発達年齢についての記述統計

QOL と自己意識発達の力動過程の検査の各データの整理を行った。QOL の総得点および 5 下位領域得点を小学生版 QOL 尺度の原尺度である「Kid-KINDL^R」の基準に合わせ、0～100 の値に換算した結果、平均値は 79.3($SD=10.73$)となった。QOL 総得点ならびに 5 下位領域の得点の平均を Table2 に示す。

Table2 全学年及び学年別と性別のQOL各得点の平均値

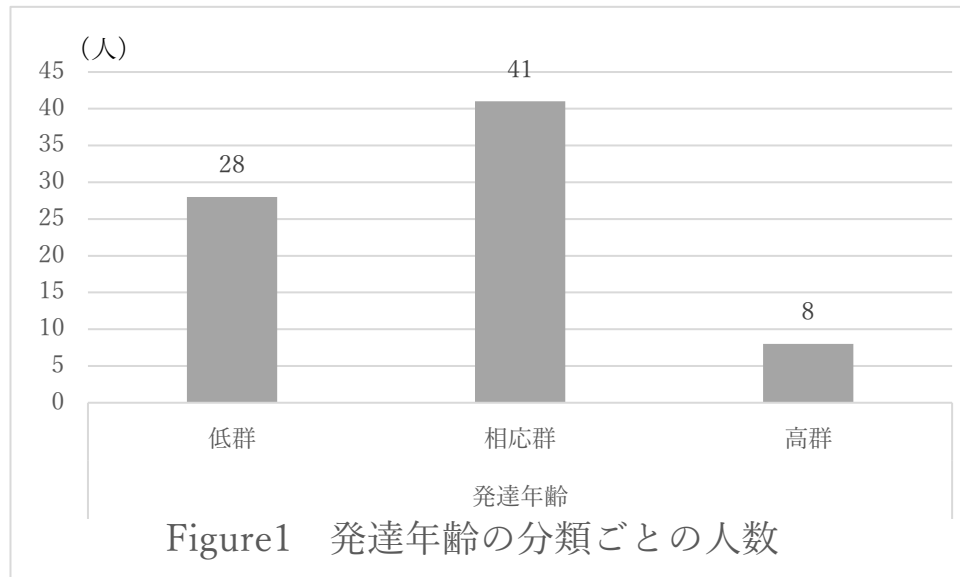
	全体	男児	女児	年長	小1	小2	小3
	($n=79$)	($n=38$)	($n=41$)	($n=27$)	($n=22$)	($n=20$)	($n=10$)
QOL総得点	79.26	78.11	80.33	82.91	81.44	74.22	74.67
精神的健康	76.14	74.47	77.68	79.63	78.41	72.25	69.50
自尊感情	82.44	81.18	83.60	81.94	87.95	77.50	81.50
家族	74.97	75.26	74.71	79.93	76.59	69.00	70.00
友だち	78.81	78.58	79.02	84.93	78.55	73.25	74.00
学校・園生活	88.61	83.95	92.93	93.33	90.00	84.00	82.00

自己意識検査の欠損値を除外した各回答の度数と比率を Table3 に示す。

Table3 自己意識検査の各質問への回答

質問項目	選択肢		
	はい(%)	いいえ(%)	
1.もう一度赤ちゃんになりたいか	26(33.3)	52(66.7)	
2.大人になりたいか	69(87.3)	10(12.7)	
3.現在の自分は気に入っているか	72(93.5)	5(6.5)	
4.すぐに1つ大きくなりたいか	66(85.7)	11(14.3)	
5.早くお兄(姉)さんになりたいか	69(87.3)	10(12.7)	
6.早く大人になりたいか	53(67.1)	26(32.9)	
7.どんなとしにでもなれるとすれば	赤ちゃん	大人	いまのまま
	7(9.1)	29(37.7)	41(53.2)
	たくさん	少し	あまり
	変わった	変わった	変わらない
8.1年前と今とを比べたとき	46(61.3)	17(22.7)	12(16.0)

グッドイナフ人物画知能検査の採点を行い、各学年において実年齢より 1 歳以上発達年齢が低いものは「低群」、実年齢と比較して点数の上下差が 1 歳以内のものは「相応群」、実年齢より 1 歳以上点数が高いものは「高群」の 3 群に分類した。結果は **Figure1** に示す。



2.CAT 図版から見た母子関係に関する分析

(1)CAT 図版における母子関係の分類

CAT により測定した図版ごとの反応を駒田ら(2001)の手法に基づき分類すると以下の結果となった。

《図版 3》

駒田らは子どもが示す母子関係の反応を「**Holding**」、「肯定的関係」、「否定的関係」、「かかわり欠如」、「母親不在」、「願望」、「わからない」の 7 つに分類しており、本研究でもその 7 群を参考に母子関係を分類した。本研究では、「かかわり欠如」の回答を示した子どもが 1 名であったため、「否定的関係」に含めて分析した。今回、登場人物に出てくる養育者が父親のみ子どもも 5 名いたが、今回の調査対象には父子家庭の子どもがいなかったために、本研究では駒田らに則って母親不在にそのまま分類した。また、「わからない」と回答した子どもがいなかったため、本研究では分類から省略した。本研究で使用した分類とその回答例、判定を以下の **Table4** に示す。

Table4 CAT図版3における母子関係の分類

分類	分類説明	人数
1.Holding	抱かれているリスを主人公、抱いているリスを母親とする。例：『お母さんがチロちゃんを抱っこしてる』	15
2.肯定的関係	抱いているリスを母親、見ているリスを主人公とし、その関係を肯定的に捉えている。例：『お母さんチロちゃんにおいでって言うてる』	28
3.否定的関係	母親との関わりが拒否的である、あるいは母親との関係が叙述されない場合。例：『お母さんがあっちいってって言うてる』『しゃべってない』	15
4.母親不在	登場人物に母親が叙述されない。※父親が表出された場合もこの分類とする。例：『チロちゃんが妹だっこしてる』『パパとチロちゃん』	9
5.願望	自分に弟や妹がいるにも関わらず、抱かれているリスを主人公とした場合。	12

先行研究では「Holding」と「肯定的関係」を「安定群」、「否定的関係」と「母親不在」と「願望」を「非安定群」の2群に分類していたため、その通りに分類したところ、安定群が43名、非安定群が36名であった。なお、本研究ではより細分化して母子関係をとらえ、分析することを試みた。先行研究ではもともと細く分類した上で2群に再分類していたため、本研究ではこの細分化した基準に基づいた分析を行った。また、これらの5つの分類では、「Holding」と「肯定的関係」がポジティブな母子関係、「否定的関係」と「母親不在」はネガティブな母子関係、「願望」は非現実的なポジティブな母子関係を反映しているともとらえることができる。そこで、本研究では「Holding」と「肯定的関係」を「安定群」、「否定的関係」と「母親不在」を「非安定群」、「願望」を「願望群」を分類し、分析に用いることとした。なお、安定群が43名、非安定群が24名、願望群が12名であった。このように、本研究では3つの分類に基づいて分析を行うことで、母子関係の影響を把握する上で、どのような分類が効果的であるかについても検討することとした。

《図版 7》

母親と子リスの関係をどう捉えたかに着目して「分離・再会」、「会話」、「要求拒否」、「分離不安」、「母親不在」、「わからない」の6つに分類しており、本研究でもその6群を参考に母子関係を分類した。本研究では、図版3と同じく、「わからない」と回答した子どもがいなかったため、本研究では分類から省略している。本研究で使った分類とその回答例、判定を以下のTable5に示す。

Table5 CAT図版7における母子関係の分類

分類	分類説明	人数
1.分離・再会	分離または再会の場面として捉え、母子の対話が肯定的に叙述されている。 例：『いってらっしゃいって言われていきますって言ってる』	16
2.会話	分離または再会の場面であると判断されないが、母子の肯定的な会話が叙述されている。例：『晩ごはん何にしようかって話してる』	8
3.要求拒否	母親への要求が拒否されている。 例：『まだ遊びたいって言ったらダメって言われた』	8
4.分離不安	母親と離れるのを嫌がっている。 例：『お母さんとバイバイ嫌って言ってる』	37
5.母親不在	登場人物に母親が叙述されない。 例：『チロちゃんが妹のお迎えにきた』	10

分類の結果、先行研究では「分離・再会」と「会話」を「安定群」、「要求拒否」と「分離不安」と「母親不在」を「非安定群」の2群に分類していたため、その通りに分類したところ、安定群24名、非安定群が55名であった。なお、本研究ではより細分化して母子関係をとらえ、分析することを試みた。先行研究ではもともと細く分類した上で2群に再分類していたため、本研究ではこの細分化した分類に基づいた分析を行った。また、これらの5つの分類では、「分離・再会」と「会話」がポジティブな母子関係、「要求拒否」と「母親不在」はネガティブな母子関係、「分離不安」は子の不安を反映しているともとらえることができる。そこで、本研究では「分離・再会」と「会話」を「安定群」、「要求拒否」と「母親不在」を「非安定群」、「分離不安」を「分離不安群」を分類し、分析に用いることとした。なお、安定群が24名、非安定群が18名、分離不安群が37名であった。このように、本研究では3つの分類に基づいて分析を行うことで、母子関係の影響を把握する上で、どのような分類が効果的であるかについても検討することとした。

今回の分析では、先行研究通りの2分類、新たに設定した3分類と、もとの分類である5分類の3つの分類において分析を行った。

(2)母子関係とQOL得点の関連

QOL得点における母子関係の影響を分析するために、QOL各得点とCAT図版3の5分類で分散分析を行った。その結果、QOLの総得点と母子関係の効果は有意であった($F(4,74)=2.92, p<.05$)。結果をTable6に示す。

Table6 図版3の5分類における母子関係とQOLの分散分析

	1.Holding	2.肯定的	3.否定的	4.母親不在	5.願望		
	<i>n</i> =15	<i>n</i> =28	<i>n</i> =15	<i>n</i> =9	<i>n</i> =12	<i>F</i> 値	多重比較
QOL	平均 (<i>SD</i>)	平均 (<i>SD</i>)	平均 (<i>SD</i>)	平均 (<i>SD</i>)	平均 (<i>SD</i>)		
総得点	72.10 (8.53)	73.47 (7.01)	64.40 (14.35)	75.18 (7.60)	71.17 (7.33)	2.92 *	2>3
精神的健康	15.00 (3.60)	15.57 (3.07)	14.53 (4.19)	15.56 (3.40)	15.33 (2.84)	.27	
自尊感情	16.63 (3.54)	17.21 (2.18)	14.33 (4.01)	18.11 (1.96)	16.08 (2.87)	3.14 *	2,4>3
家族	15.93 (3.15)	15.09 (2.79)	13.20 (2.78)	15.44 (3.17)	15.50 (2.50)	2.03	
友達	15.80 (2.65)	16.20 (2.17)	14.33 (3.20)	16.73 (1.69)	15.75 (2.53)	1.78	
学校生活	8.73 (1.39)	9.39 (1.03)	8.00 (2.62)	9.33 (1.41)	8.50 (1.51)	2.12 †	

* $p<.05$, † $p<.10$

多重比較の結果、「肯定的関係」と「否定的関係」の間に有意差があり、母子関係の語りが肯定的であった子どもは否定的な内容の母子関係を語った子どもよりも QOL の総得点が高かった。また、QOL の自尊感情と母子関係の効果は有意であった($F(4,74)=3.14$, $p<.05$)。多重比較の結果、「肯定的関係」と「否定的関係」、「母親不在」と「否定的関係」の間に有意差があった。母子関係の語りの内容が肯定的であった子どもとそもそも母子関係の語りをしない子どもは、否定的な内容の母子関係を語る子どもよりも QOL の自尊感情の得点が高かった。さらに、QOL の学校生活には有意傾向がみられたが($F(4,74)=2.12$, $p<.10$)、多重比較の結果、5 分類間に有意差はみられなかった。

一方、CAT 図版 3 の 2 群と 3 群での分類では、いずれも群間に有意差はみられなかった。

次に、QOL 各得点と、CAT 図版 7 の 3 群とで分散分析を行った。その結果、QOL の家族と母子関係の効果は有意であった($F(2,76)=3.39$, $p<.05$)。多重比較の結果、「非安定群」と「分離不安群」の間に有意差があり、母子関係の語りの内容があまり良好ではない子どもは、分離不安を示す子どもよりも QOL の家族の得点が高かった。結果を Table7 に示す。

なお、CAT 図版 7 の 2 群と 5 群での分類では、いずれも群間に有意差はみられなかった。

Table7 図版7の3分類における母子関係とQOLの分散分析

	1.安定群	2.非安定群	3.分離不安		
QOL	<i>n</i> =24	<i>n</i> =18	<i>n</i> =37	<i>F</i> 値	多重比較
	平均値(<i>SD</i>)	平均値(<i>SD</i>)	平均値(<i>SD</i>)		
QOL総得点	71.52(11.64)	74.42(8.77)	69.70(8.47)	1.47	
精神的健康	15.29(3.61)	16.11(2.89)	14.76(3.39)	1.00	
自尊感情	16.27(3.64)	17.11(2.59)	16.32(3.05)	.46	
家族	15.13(3.23)	16.37(3.53)	14.24(2.15)	3.39 *	2>3
友達	16.04(3.07)	15.78(2.34)	15.57(2.32)	.24	
学校生活	8.79(2.15)	9.06(1.39)	8.81(1.45)	.16	

**p*<.05

(3)母子関係と自己意識の関連

CAT 図版 3 の 3 群の分類と自己意識検査との関連について検討するために、 χ^2 検定を行った。その結果、母子関係と自己意識検査の質問項目 7「もし、どんなとしにでもなれるとすれば、次のうちどれに一番なりたいですか」において有意差がみられた($\chi^2(4)=10.41$, $p<.05$)。そこで、残差分析を行った結果、非安定群は「赤ちゃん」の回答比率が高く($p<.05$)、安定群は「いまのまま」の回答比率が高かった($p<.05$)。結果を Table8 に示す。

Table8 「どの年齢になりたいか」の質問に対する母子関係の反応ごとの人数

		どの年齢に一番なりたいか			合計
		赤ちゃん	大人	いまのまま	
CAT図版3	安定群	2	12	27	41
	非安定群	5	10	9	24
	願望群	0	7	5	12
合計		7	29	41	77

p<.05

一方、CAT 図版 3 の 2 群と 5 群での分類では、いずれも群間に有意差はみられなかった。

CAT 図版 7 の 5 群において χ^2 検定を行った結果、母子関係と自己意識検査の質問項目 1「あなたはもう一度赤ちゃんになりたいですか」において有意差がみられた($\chi^2(4)=11.37$, $p<.05$)。そこで、残差分析を行った結果、質問に対して、母親不在は「はい」の回答比率が高く($p<.05$)、要求拒否は「いいえ」の回答比率が高かった($p<.05$)。結果を Table9 に示す。

CAT 図版 7 の 2 群と 3 群での分類では、いずれも群間に有意差はみられなかった。

Table9 「赤ちゃんになりたいか」の質問に対する母子関係の反応ごとの人数

		赤ちゃんになりたいか		合計
		はい	いいえ	
CAT図版7	分離・再会	3	12	15
	肯定的な会話	3	5	8
	要求拒否	0	8	8
	分離不安	13	24	37
	母親不在	7	3	10
合計		26	52	78

 $p<.05$

CAT 図版 7 の 2 群の分類において χ^2 検定を行った結果、母子関係と自己意識検査の質問項目 5「早く大きいおにいさん(おねえさん)になりたいですか」において有意差がみられた($\chi^2(1)=5.00, p<.05$)。そこで、残差分析を行った結果、質問に対して、安定群は「はい」の回答比率が高く($p<.05$)、非安定群は「いいえ」の回答比率が高かった($p<.05$)。結果を Table10 に示す。

Table10 「お兄(姉)さんになりたいか」の質問に対する母子関係の反応ごとの人数

		お兄さん・お姉さんになりたいか		合計
		はい	いいえ	
CAT	安定群	24	0	24
図版7	非安定群	45	10	55
合計		69	10	79

 $p<.05$

CAT 図版 7 の 3 群と 5 群での分類では、いずれも群間に有意差はみられなかった。

また、上記以外の自己意識検査の質問項目と、CAT 図版 3 と 7 それぞれの分類においての χ^2 検定を行った結果、いずれの分類法においても有意差はみられなかった。

(4)母子関係と精神発達の関連

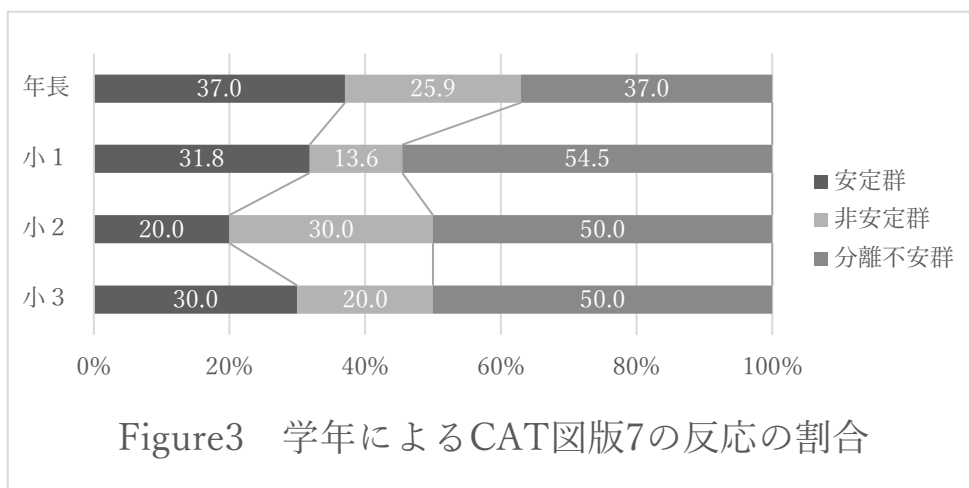
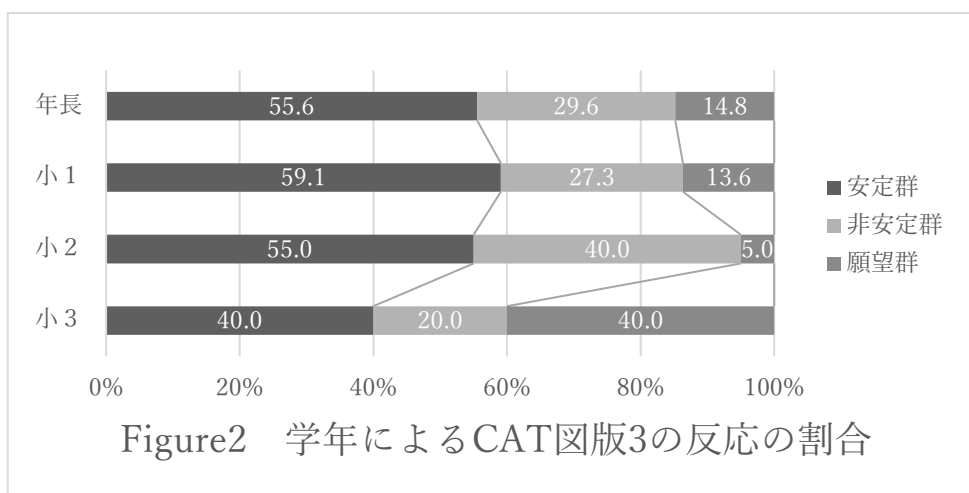
CAT の図版 3 と 7 のそれぞれの分類ごとに精神発達の程度に違いがみられるかについて検討するために、グッドイナフ人物画知能検査による発達年齢の分類との χ^2 検定を行った。CAT 図版 3 や 7 とグッドイナフ人物画知能検査による発達年齢の χ^2 検定の結果、CAT 図版 3 と 7 のいずれの分類法においても母子関係と精神発達の程度との間に有意差はみられなかった。

3. 学年差からみる各因子

(1) 母子関係

母子関係の発達的变化を把握するため、本研究では補足的な関心として、CATの図版3と7のそれぞれの分類と学年差の関連について検討するために χ^2 検定を行った。その結果、いずれの分類法においても学年との間に有意差はみられなかった。

以下に、CATの図版3と7それぞれの3分類による、学年ごとの反応の割合をFigure2、Figure3に示す。



(2) QOL

QOLの発達的变化を把握するため、本研究では補足的な関心として、QOL得点と学年差の関連を検討するために、分散分析を行った。その結果、QOL総得点において有意差がみられた($F(3,75)=3.53, p<0.05$)。多重比較によれば、QOL得点は「年長児」が「小2」よりも有意に高かった。QOL友達も有意差

がみられた($F(3,75)=4.02$, $p<.01$)。多重比較によれば、QOL 得点は「年長児」が「小 2」よりも有意に高かった。また、家族では有意差はみられた($F(3,75)=2.77$, $p<.05$)。多重比較を行った結果、年長児と 2 年生の間に有意傾向がみられた($p<.10$)。これらの結果を Table11 に示す。

QOL	1.年長 $n=27$ 平均値 (SD)	2.小 1 $n=22$ 平均値 (SD)	3.小 2 $n=20$ 平均値 (SD)	4.小 3 $n=10$ 平均値 (SD)	F値	多重比較
QOL総得点	74.62 (7.60)	73.30 (7.79)	66.80 (12.04)	67.20 (12.04)	3.79 *	1>3
精神的健康	15.93 (3.12)	15.68 (3.21)	14.45 (3.46)	13.90 (3.81)	1.43	
自尊感情	16.39 (3.05)	17.59 (2.02)	15.50 (3.86)	16.30 (3.40)	1.64	
家族	15.99 (3.20)	15.32 (2.36)	13.80 (2.71)	14.00 (3.06)	2.77 *	
友達	16.99 (1.87)	15.71 (2.75)	14.65 (2.18)	14.80 (3.22)	4.29 **	1>3
学校生活	9.33 (1.00)	9.00 (1.57)	8.40 (1.79)	8.20 (2.62)	1.88	

* $p<.05$, ** $p<.01$

(3)自己意識

自己意識についての発達的变化を把握するため、本研究では補足的な関心として、自己意識検査の項目それぞれにおいて学年差との関連性を検討するために χ^2 検定を行った。その結果、自己意識検査の項目それぞれにおいて学年による有意差はみられなかった。

(4)精神発達

精神的発達と実際の発達的变化について把握するため、本研究では補足的な関心として、グッドイナフ人物画知能検査の採点結果と学年差との関連性を検討するために χ^2 検定を行った。結果を Table12 に示す。

Table12 人物画知能検査からみる発達年齢と学年差

		発達年齢			合計
		低群	相応群	高群	
学年	年長	5	18	2	25
	小1	5	15	2	22
	小2	10	7	3	20
	小3	8	1	1	10
合計		28	41	8	77

 $p<.01$

χ^2 検定の結果、有意差が見られた($\chi^2(6)=17.15, p<.01$)。そこで、残差分析を行った結果、年長児は「相応群」の比率が高く($p<.01$)、「低群」の比率が低かった($p<.01$)。また、3年生は「低群」の比率が高く($p<.05$)、「相応群」の比率が低かった($p<.01$)。

IV. 考察

本研究では、現代の子どもが形成する母子関係が、子どもの QOL にどのような影響を与えるのか、安定した母子関係がどのような自己意識を子どもに芽生えさせるのか、母子関係と精神発達の関連性の 3 側面を捉えることを目的とした。あわせて母子関係や QOL、自己意識、精神発達の学年による発達の变化についても検討を行った。なお、駒田ら(2001)の先行研究において 2 群で分析されてきた母子関係を、より詳細な反応の分類に基づいて母子関係の差異の検討もすることとした。

1. 母子関係の及ぼす影響

(1) QOL との関連

CAT 図版への回答を分類し、その分類間で QOL に差が見られるかについて検討した。CAT 図版 3 を「Holding」、「肯定的関係」、「否定的関係」、「母親不在」、「願望」の 5 群に分類し分析を行った場合に、「肯定的関係」と「否定的関係」の 2 群の間に 2 つの結果が得られた。1 つめは、QOL 総得点において、図版に「肯定的関係」を投影した子どもは「否定的関係」を投影した子どもよりも QOL が高かった。2 つめは、QOL の下位分類である自尊感情も図版に「肯定的関係」を投影した子どもと母子関係の投影がみられなかった子ども(母親不在群)は「否定的関係」を投影した子どもよりも自尊感情が高かった。上記の 2 点から、安定した母子関係の子どもは QOL の総得点が高く、自尊感情も高いため、心身ともに健全な発達をしているといえる。

一方、「母親不在」群の子どもが「否定的関係」を投影した子どもより QOL の自尊感情得点が高かったという結果は次のように解釈できる。本研究では駒田らの先行研究に依拠して母子関係に限定して分析したが、図版 3 の「母親不在」の分類に約半数が母親の代わりに父親と子どもの関係を語った反応を含んでいた。Bowlby (1969; 1973) は養育者とのアタッチメント関係が健全な心身の発達につながると論じており、アタッチメント対象を母親だけに限定していない。子どもの自尊感情は父親との間に安定したアタッチメント関係が形成されている場合も育まれると考えられるため、今回「母親不在」群の自尊感情得点が「否定的関係」群よりも高くなったと予想される。

また、CAT 図版 7 を「安定群」、「非安定群」、「分離不安群」の 3 群に分類した場合に、「非安定群」の子どもは「分離不安群」の子どもよりも QOL の家族の得点が高かった。分離不安群は非安定群の子どもたちよりも家族に対する不安や不満が高いが、「非安定群」の中に含まれる母親から要求を拒否されるような具体的な不満の反応を示すわけではない。分離不安群は子どもの抱えている寂しさの反映と考えられる。

今回の投影法で見られた母子関係においては、非安定群の割合が高く、母子関係の質自体は不安が多いが、友達や学校生活など家庭外の生活の質には関連がみられなかった。学校の中で特に問題のない子どもの中にも、投影法で捉えた母子関係は不安定な要素を含んでいる子どももいると考えられる。

(2) 自己意識との関連

CAT 図版への回答を分類し、その分類間で自己意識に差が見られるかについて検討した。その結果、CAT 図版 3 を「安定群」、「非安定群」、「願望群」の 3 群に分類した場合に、分類間で自己意識検査の質問項目 7「もし、どんな年にでもなれるとすれば、次のうちどれに一番なりたいですか」に対する回答に差がみられた。安定群は「いまのまま」が高く、非安定群は「赤ちゃん」が高かった。これらの結果は、安定した母子関係を築いている子どもは現在の自己への満足度を高め、母子関係が良好ではない子どもが現在の自己への満足度が低く退行欲求を高める可能性を示唆している。都筑(1981; 1983)は、自己意識の健全な発達には子どもが自身の現在の生活と未来の生活の両方が豊かなものとして認識していることが重要であると述べていることから、母子関係が安定していると自己意識の健全な発達を促進するという本研究の仮説と一致する。

一方、CAT 図版 7 から 2 つの結果が得られた。1 つめは、CAT 図版 7 を「分離・再会」、「会話」、「要求拒否」、「分離不安」、「母親不在」の 5 群に分類した場合に、分類間で自己意識検査の質問項目 1「あなたはもう一度赤ちゃんになりたいですか」に対する回答に差がみられた。母親不在群は「はい」の回答比率が高く、要求拒否群は「いいえ」の回答比率が高かった。母親が物語に出てこない子どもは赤ちゃんになりたいと考えており、母親に対する

イメージが否定的な子どもはなりたくないと考えているということがわかる。2つめは、CAT 図版 7 を「安定群」、「非安定群」、「分離不安群」の 3 群に分類した母子関係と自己意識検査の質問項目 5「早く大きいおにいさん(おねえさん)になりたいですか」に対する回答に差がみられた。安定群は「はい」の回答比率が高く、非安定群は「いいえ」の回答比率が高かった。子どもの語る母子関係が安定している群は成長することを望んでおり、子どもの語る母子関係が良好ではない群は、成長に抵抗を感じている傾向があると考えられる。

家庭内と分離場面の 2 つの母子関係を総合的に見て、安定した母子関係を構築している子どもは、現在の自己への満足度が高く未来への期待が高いということ、CAT 図版 3 の非安定群や、図版 7 の要求拒否群、分離不安群など良好ではない母子関係を示す子どもは、現在の自己への満足度が低く退行的であることが推測され、仮説と一致している。

(3)精神発達との関連

本研究は、「母子関係が安定している児童は、精神的な発達が早熟である」という仮説のもと、母子関係の 2 つの視点から分析を行った。結果、CAT 図版 3 と 7 のいずれの分類法においても有意差はみられず、今回の結果からは母子関係とグッドイナフ人物画知能検査による発達の程度とは直接的な関係はみられず、精神発達の程度が低くても母子関係が安定している子どももいれば、精神発達が高くても非安定な母子関係を示す子どももあり、一貫性のある結果は得られなかった。

母子関係と精神発達の間に関連はみられなかったが、本研究の調査対象の 2 年生と 3 年生の人物画知能検査の発達年齢の分類が「低群」の子どもが多く、CAT 図版 7 で「分離不安」のタイプを示す子どもの数が多かったことが特徴的であった。CAT 図版 7 は登園時の様子についての絵であるが、調査対象者の約半数の子どもが母子分離を嫌がる反応を示した。Bowlby(1969;1973)によると、分離不安は定型的な発達の途中で通常 6 ヶ月前後に出現し、就学前の数年は顕著であると言われているが、「心のなか」にアタッチメント対象を保持する能力である IWM を身につけることによって不安は漸減していくとされている。このことから学童期に入っても分離不安のタイプを示す子どもたちは、精神的な発達においても幼さがみられる可能性が示唆される。

2.母子関係の分類

本研究では、母子関係の分類を安定と非安定の 2 群よりも細分化してみることで、QOL や自己意識との詳細な関連をみることができた。詳細な差には、以下のようないくつかの特徴がみられた。

まず、QOL 得点においての分析で CAT の図版 3 を「Holding」、「肯定的関係」、「否定的関係」、「母親不在」、「願望」の 5 群に分類した場合

に、「肯定的関係」と「否定的関係」という両極に二分したものに違いがあるだけでなく、「母親不在」と「否定的関係」という非安定群の中でも子どもが示す特徴に違いがみられた。また、自己意識における分析ではCATの図版3を「安定群」、「非安定群」、「願望群」の3群で分類した場合に、自己意識検査の質問項目7「もし、どんなとしにでもなれるとすれば、次のうちどれに一番なりたいですか」に対する回答に差がみられた。これらのことから、先行研究では非安定群に分類されていた「母親不在」を示す子どもたちも、現代の親子関係が多様化し、本研究の子どもたちのように母親に限定せず父親との安定したアタッチメント関係を示す場合もあるため、一概に非安定とすることが望ましくない可能性がある。

また、CATの図版7では「安定群」、「非安定群」、「分離不安群」の3群に分類した場合に、「非安定群」と先行研究では非安定群に含まれている「分離不安群」でQOLの家族の得点に差がみられた。また、CATの図版7を「分離・再会」、「会話」、「要求拒否」、「分離不安」、「母親不在」の5群に分類した場合に自己意識検査の質問項目1「あなたはもう一度赤ちゃんになりたいですか」において、同じ非安定群である「要求拒否」のタイプを示す子どもと「母親不在」のタイプを示す子どもの回答に差がみられた。これらのことから、CATの図版3と同じく、図版7においてもネガティブなイメージのタイプを一概に非安定とすることは望ましくないと考えられる。

3.本研究の意義

本研究では、従来ある母親に対する調査や子どもの行動観察ではなく、幼児期から児童期前期の子どもに対して投影法による調査を行い、母子関係の反応の分類をした。そして、子どもから聞き出した詳細な母子関係から、子どものQOLや自己意識との関連をみることができた。安定した母子関係を築いている子どもは、QOLや自尊感情が高く、現在の自分自身や未来の自分に対する期待が高かった。

さらに、母子関係の反応の分類を詳細に検討することで、先行研究のような安定群・非安定群の2群では不明瞭な子どもの像を明らかにした。中でも、小学生の分離不安群が多いことが本研究の特徴の1つといえる。分離に対する不安は、就学前の数年の間は顕著なままであるが、次第に対象恒常性を身につけることによって、不安は漸減していく。しかし、今回の調査群は約半数が分離不安を示しており、中学年に分類される3年生も50%が分離不安群であった。本研究の調査対象は保育園に通園している幼児と学童保育を利用している小学校低学年児であることから、共働き家庭が多いことが予測され、日常生活において長時間保育園や学童保育に預けられることで養育者と過ごす時間が短く、長時間の分離を体験していることが影響すると考えられる。分離不安の反応を示した子どもたちは、家族ともっと過ごしたいという子どもたちの心の声を反映しているのではないだろうか。親も終業後には家事や雑務等をしなけ

ればならないなど余裕がない状態で、日常的に子どもと質の高い時間を過ごすことは難しいと考えられる。今後、さらに労働時間が長時間化し、母親の就業率も増加すると、分離不安を示す子どもが増加する可能性が懸念される。分離不安障害は精神疾患であり、障害と診断されておらずとも、分離不安を示す子どもが多いこの状況は望ましくないと考えられる。

4. 今後の課題

今回、1つの施設に対しての調査であったので、結果に大きく偏りが生まれていると考えられる。今回の結果が本研究の調査対象に特有のものか、それとも保育園や学童保育の子ども特有のものなのかを検討し、今後一般化可能か検討する必要がある。

V. 謝辞

本研究のために、ご協力いただいた子どもたちに心より感謝いたします。また、調査依頼に快く了承していただき、調査実施にご尽力いただいたこども園の職員の皆様に心より感謝いたします。最後に、研究にあたり、ご指導いただきました先生方にも心より感謝申し上げます。

VI. 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Bell, S. M., & Stayton, D. (1974). Infant-mother attachment and social development. In M. P. Richards (Ed.), *The introduction of the child into a social world* (pp. 99-135). London: Cambridge University Press.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Walls, S. (1978). *Patterns of Attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bellak, L. (1971). *The TAT & CAT in clinical use*. New York: Grune & Stratton.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- (ボウルビィ, J. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳(1976). 母子関係の理論 1 ② I 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- (ボウルビィ, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳(1977). 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社)
- 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子(2014). 子どもの QOL 尺度その理解と活用-心身の健康を評価する日本語版 KINDL^R 診断と治療社

- Kerns, K. A.(2008). Attachment in middle child hood. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment : Theory, research, and clinical applications (2nd ed)* New York : Guilford Press.
- 木村治生(2009). 何が「家庭での学習」を促すのか～親子関係を中心に考える
第2回子ども生活実態基本調査報告書
https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2020/hon0_4a.html (2018年12月11日)
- 小林重雄(1977). DAM 人物画知能検査ハンドブック 三京房.
- 駒田閑子・別府哲・宮本正一(2001). 幼児における移行対象と愛着の発達 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, *50*, 101-112.
- 小松孝至(2003). 幼稚園での経験、友だち、保育者に関する母子の会話：話題と子どもの語り方についての母親の報告から 発達心理学研究, *14*, 294-303.
- Koot, H. M.(2001). The Study of Quality of Life: Concepts and methods. In Koot,. M. & Wallander, L. J. (Ed.) *Quality of Life in Child and Adolescent Illness: Concepts, Methods, and Findings*. New York; Brunner-Routledge, 3-20.
- 厚生労働省(2017). 国民生活基礎調査の概況
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/index.html>
(2018年12月11日)
- 久保田まり(1995). アタッチメントの研究 内的ワーキング・モデルの形成と発達 川島書店
- Main, M., & Solomon, J.(1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), *Attachment in the preschool years*. Chicago: University of Chicago Press.
- 内閣府 (2008). 青少年白書
<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h20honpenhtml/index.html>
(2018年12月11日)
- 内閣府 (2018). 子供・若者白書
<https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h30honpen/index.html> (2018年12月11日)
- Schipper, H., Clinch, J.J., & Olweny, C. L. M. (1996). Quality of life studies: Definitions and conceptual issues. In B. Spilker (Ed.), *Quality of life and pharmacoeconomics in clinical trials*. 2nd ed. Philadelphia, PA: Lippincott-Raven Publishers. 11-23.
- 柴田玲子 (2012). 小学生版・中学生版 QOL 尺度 子どもの科学, *13*, 39-46.
- Sroufe, L. A., Waters, E. (1977). Attachment as an organizational construct. *Child Development*, *56*, 1 -14.

- 谷口清(2016). アタッチメントの形成と脳-パーソナリティ発達のメカニズムを考える- 心理科学 第37巻 第2号 38-47.
- 戸田弘二(1990). 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連 北海道教育大学紀要 1-C, 41, 91-99.
- 戸川行男(1955). 幼児・児童絵画統覚検査解説 CAT 日本版 金子書房
- 都筑学(1981). 幼児の自己意識の発達 教育心理学研究, 29, 70-74.
- 都筑学(1983). 児童の自己意識の分析 大垣女子短期大学研究紀要, 17, 72-78
- Zazzo, B.(1960). Le dynamism évolutif chez l'enfant. In R. Zazzo (Ed.) *Des garçons de 6 à 12 ans*. Paris:P. U. F.
- (ザゾ・B 久保田正人・塚野州一(訳)(1974). 発動の力動課程 ザゾ・R(編) 学童の生長と発達 明治図書)